

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

(1) はじめに

昭和60年に奈良県の樅原考古学研究所で開催された第17回埋蔵文化財研究会「形象埴輪の出土状況」において、私は、関東地方の埴輪の地域的特色について発表する機会があり、後期段階にきわめて特徴的なあり方を示すことについて述べた。その際、南雲芳昭氏と共同で群馬県の埴輪出土古墳地名表を作成し、136基の古墳を挙げることができた。その大半は後期に属するものであった。この地名表を作成した時の方針として、対象を発掘調査を経ており、形象埴輪の出土状況を具体的に把握できるものに限定したため、実際に埴輪を有する古墳の総数よりは大幅に少ないと明瞭であった。それでも、この地名表が掲載された研究会資料集の他県の状況を通して見ると、奈良県や大阪府とともに突出した数にのぼっていることがわかる。その場合、奈良県や大阪府のものが前・中期を中心とするのに対し、群馬県のものが圧倒的に後期に集中する点で顕著な地域差を示していた。

その後、「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」(『古文化談叢』21の下)⁽²⁾と題する小文を発表し、上野地域を中心とした東国における埴輪樹立の展開過程を具体的に跡づける作業をおこなった。その際、再度の関係資料の涉獵から、上野地域における後期段階の埴輪樹立古墳は、前述の数を大幅に上回るものであることがわかつってきた。その背景には、5世紀後半から6世紀にかけて形成された群集墳中の多くの小型古墳に埴輪が伴うことが要因として考えられる。

近畿地方を中心とした他地域では、6世紀に入ると埴輪を伴う古墳は急速に減少し、しかも前・中期の充実した内容にくらべて衰退の一途をたどっていったことが明確に読み取れる。上野地域以外の東国の他地域(特に北武藏、下野、下総、上総、常陸)

でも、程度の差こそあれ、上野地域と同様の状況を示している。ここに、後期段階における東国の中でも、極めて地域色の強い展開を示していったことが理解されたところである。

下條1・2号古墳、口明塚2号古墳は、このような上野地域の地域的特色を備えた後期古墳の典型的なものであった。そこで、これらの古墳における埴輪樹立の意義を正しく理解するため、まず、現時点できること限り網羅的な埴輪出土古墳地名表を作成することにした。今回の地名表作成では、調査により埴輪出土が確認された古墳はすべて対象とした。また、発掘調査によらなくとも、現地踏査等により埴輪を伴うことが知られているものも含めることとした。

本節では、地名表作成の結果を受けて、まず埴輪樹立古墳の傾向を整理することとする。また、その上で上野地域の埴輪樹立古墳の様相を変遷史的に再度概観し、あわせて今後の課題について考えてみたい。

(2) 塩輪出土古墳地名表の作成結果をめぐって
上野地域で埴輪を伴うことが確認できた古墳は、全体で1155基を数えることができた。そのうち発掘調査により伴うことが確認できた古墳は、497基である。497基という数は、従来の調査古墳すべての中から抽出したものではないので、そこから漏れているものもかなりの数にのぼると思われる。

1155基のうちには、すでに墳丘が消滅してしまっているため現在では実際に確認できないものもあるが、将来的に発掘調査の増加の中で新たに加わるものも多いと思われる。今後埴輪存在の有無を念頭においての踏査が厳密に行なわれるならば、この数はさらに増えるものと思われる。

ところで、調査により埴輪が伴うことが確認された古墳の中には、前橋市の芳賀西部工業団地古墳群⁽³⁾、勢多郡粕川村白藤古墳群⁽⁴⁾に代表されるように、後期前半の低墳丘の小型円墳から構成される初期群集墳で、発掘調査前には古墳群の存在がまったく知られていなかったものがかなりの数にのぼっている。こ

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

の種の古墳群は、今後の発掘調査の進行の中でその事例を大幅に増加させていくものと確信している。このことも、今後新たに加わる可能性のある埴輪出土古墳の中に含めておく必要があろう。

確実な根拠を持ち合わせているわけではないが、上野地域の埴輪出土古墳の数は、2000基を優に越えるものと確信している。

次に、地名表をもとに埴輪出土古墳の時期別の数と墳丘形態からの分類を表にまとめてみると以下のようである。

表中、方墳および上円下方墳として挙げられているものは、昭和初期の分布調査の時点での認識であり、埴輪を伴なうことについては問題ないが、墳形については再考の余地を残している。恐らく、円墳が、後世の耕作等により改変されたものであろう。

大まかな目安として、前期を4世紀前半ないし中葉から末葉までの段階とし、大型前方後円墳に定型化した盾形周濠が導入される以前とする。中期は、5世紀初頭から5世紀第3四半期までとし、巨大前方後円墳の築造を特徴とし、円筒埴輪の外面調整に2次調整のB種横ハケが主体的に残る。後期前半は5世紀第3四半期ないし第4四半期から末葉にかけてで、横穴式石室出現前の段階とする。低墳丘で竪穴系の小規模な主体部を有する群集墳がさかんに形成される。後期後半は6世紀初頭から6世紀末葉ないし7世紀初頭の時期で、横穴式石室を主体部とす

る古墳が中心で前方後円墳の消滅前の段階である。

分類結果から、いくつかの顕著な傾向を見い出すことができる。

まず出土古墳を時期別に見てみると、前・中期では埴輪を伴なう古墳は極めてわずかである。その傾向は、前期により著しい。中期になって該当古墳が前代よりも増加するのは、埴輪樹立が定着したことの現れであろう。それでもその数はごくわずかである。古墳築造自体がごく限られた階層の占有物であり、埴輪もそれと表裏一体の関係にあったものと思われる。それゆえ、前・中期とも埴輪を伴なうものは、前方後円墳を中心とし、これに中・大型の帆立貝式古墳と円墳のみである。

後期に入ると埴輪を伴なう古墳が飛躍的に増加する。その急増した数を支えているのは、主として円墳である。前述したようにこれらは、群集墳を構成する低墳丘の中・小規模古墳であり、発掘調査により偶然発見されたものが大半である。それゆえ、今後、この段階の古墳の数がまだまだ増えていくことを十分想定することができる。この段階に大きな画期点を置くことができるのは言うまでもない。

後期後半になると埴輪を持つ古墳はさらに増える。ここでも圧倒的な割合を占めるのは、群集墳を構成する小型円墳である。墳形不明としているうちの多くも円墳であろうことは想像に難くない。この数も将来的に大きく増える可能性が強い。

後期に特徴的な人物・馬形埴輪を出土することや群集墳中の一角を占めることから、主体部の形式が明らかでないものについては、前・後のいずれに属するか明らかでないが、少なくとも後期のワクに収まるることは明らかであるのでこれらを一括した。これを合わせると、後期段階に属するものが930基にのぼり、埴輪樹立古墳全体の約80%に達する。

墳丘周囲から埴輪片が採集されるが、時期を特定できない「不明」としたもの192基のうち、その大半が後期に属することは容易に想像できる。とするならば、実に全体の95%近くが後期

埴輪出土古墳の時代別数と墳丘形態からの分類

時期/墳形	前方後円	帆立貝	円	方	上円下方	不明	計
前期	4	0	0	0	0	0	4
中期	11	3	12	1	0	2	29
後期	10	15	114	2	0	3	144
	91	9	383	1	0	30	514
後期	25	11	197	2	0	37	272
不明	26	0	121	0	1	44	192
計	167	38	827	6	1	116	1155

IV 考 察

に属することになる。この割合は今後、その度合を強くすることはあっても、弱まることはないものと確信している。

(3) 小型古墳における埴輪樹立の展開

今回の地名表作成を通して、当地域では予想を大きく上回る数の古墳に埴輪が樹立されたことが明らかになり、また、その大半が古墳時代後期の群集墳を構成する小型古墳であることを具体的に知ることができた。そこで次に、このきわめて地域性の強い埴輪樹立形態が成立した背景を、小型古墳におけるあり方を通じて検討してみたい。

初期群集墳と埴輪 近年の大規模開発の進行の中で、平地部で広範囲に及ぶ発掘調査が輩出するようになった結果、5世紀後半から6世紀初頭にかけての時期に形成される群集墳の事例が増加している。これらを構成する古墳の多くは、低墳丘であり、小規模な竪穴系の埋葬施設を主体部とする中・小型古墳である。そのため、横穴式石室墳のように、発掘調査前にその存在が知られることはほとんどなかつたわけである。この種の古墳群は、平野部とこれに面する台地部で広域に確認されており、急激にしかも一斉に展開した点に大きな特徴がある。

いずれの古墳群の場合にも、埴輪を伴なっている点もまた大きな特色である。その場合、古墳群を構成するすべての古墳に伴なうわけではなく、相対的に墳丘規模の大きいものにのみ伴なうという顕著な傾向が認められる。

初期群集墳の成立してくる背景として、この時期に農業生産力が飛躍的に向上した結果、家長層の有力化が急速に進行したため、階層秩序の再編成が迫られたことが挙げられる。群集墳の築造により有力化した家長層を新たな古墳秩序に組み込んでいったのである。一義的には、墳丘規模の相対的な大小によって、そのことを表現していることが、初期群集墳の構造から明確に読み取れる。と同時に、埴輪の有無もまた、古墳のランクづけの重要な要素として位置づけられていたわけである。⁽⁶⁾

勢多郡柏川村の白藤古墳群では、当該期の調査古

墳36基はすべて円墳であり、直径10m前後のもの6基、15m前後のもの18基、20m前後のもの7基、それ以上のもの5基から構成されていた。これらのうち古墳群内で相対的に規模の大きい14基に埴輪が伴なっていた。

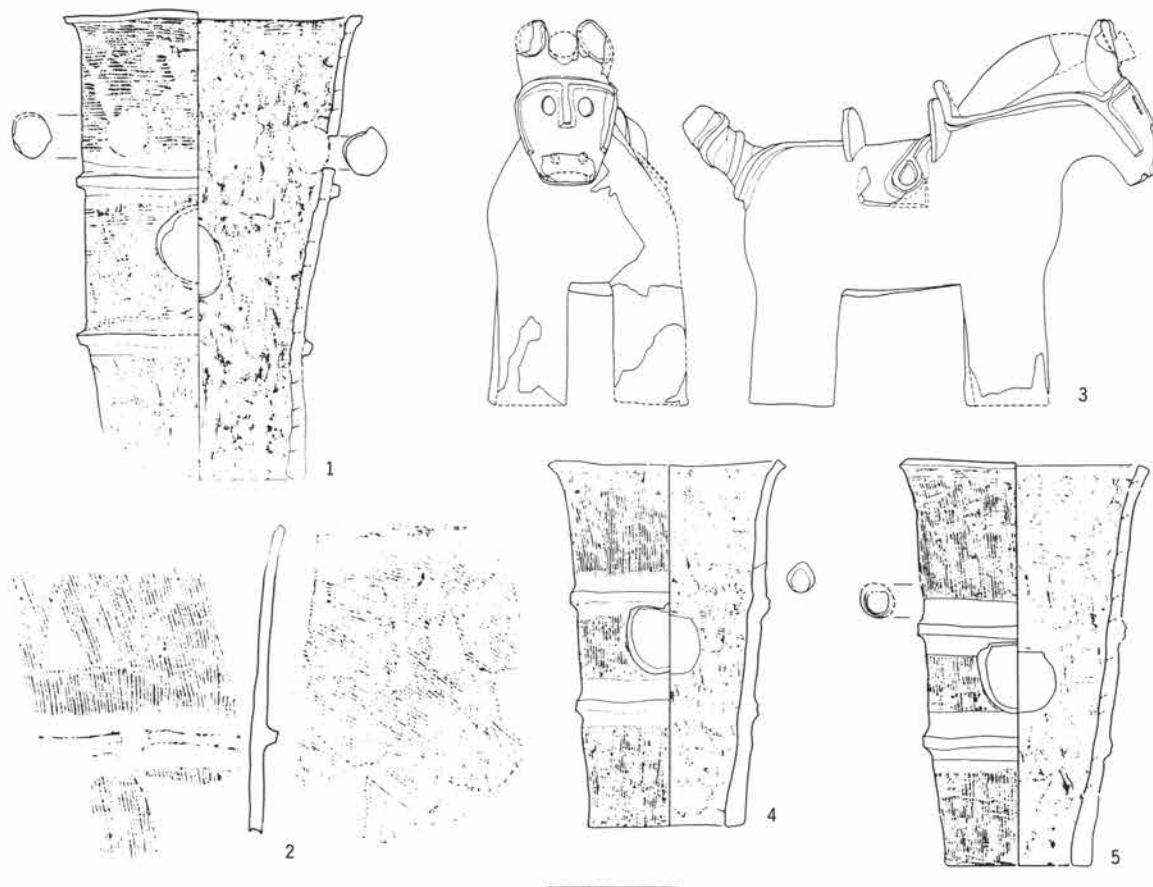
出土した円筒埴輪の様相から見ると、古墳群の形成の初期に位置づけられる4基（Q-1、Y-4、Y-5、Y₁-2号古墳）のものは、外面調整にB種横ハケを残し、その後に形成されたことが推定される10基に伴なうものは、一次調整の縦ハケのみである。それらのいずれも3段構成であり、第2段に主として半円形の透孔が穿たれる点で共通している。また、両群にまたがって、中段の透孔とは別に第3段に円形の小型透孔が1個穿たれるものが共通して認められる。これらのこととは、B種横ハケから縦ハケのみへの変化の過程が連続的でスムースなものであったことを物語っているものと考えられる。

一方、14基中の6基には人物・馬形埴輪が伴なっている。これら6基の円筒埴輪はすべて縦ハケのみであることから、人物・動物埴輪導入時期の定点として把えることが可能である。これらの古墳から出土した土器類を合わせて考えると、その時期は、5世紀第4四半期を中心としていることが推定される。ちなみに、当地域の前方後円墳で人物・動物埴輪を伴なう最も早い段階のものとされている井出二子山古墳の場合、円筒埴輪は縦ハケのみのものを主体としており、ごく一部客観的にB種横ハケが認められることから、白藤古墳群の様相にほぼ整合してくることが理解できる。⁽⁷⁾

佐波郡境町下淵名古墳群では、当該期の調査古墳13基はやはりすべて円墳であり、直径10m前後のもの4基、15ないし20m前後のもの6基、25ないし30m前後のもの2基と37mの最大のもの1基から構成されていた。そして、墳丘規模の相対的に大きいもの6基から埴輪が確認されている。

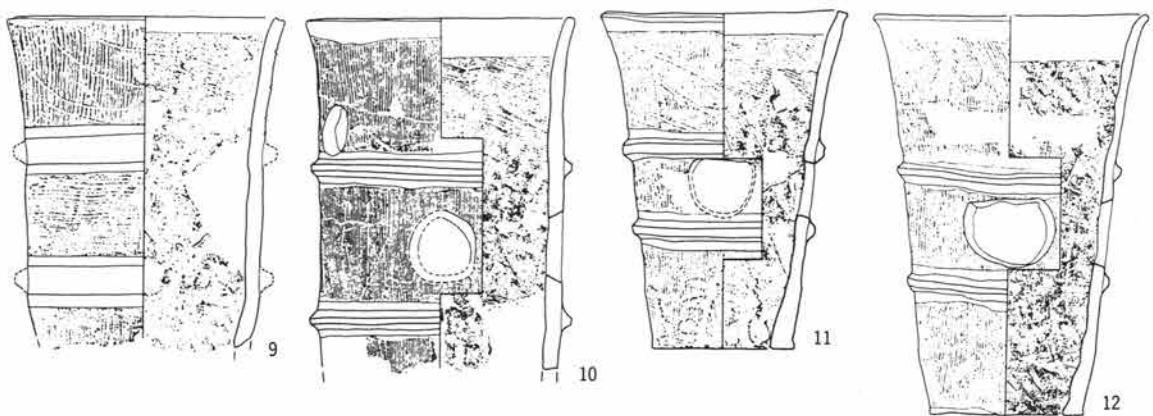
これらのうちの1基（9号古墳）のみが、円筒埴輪のごく一部に客観的にB種横ハケをのこしている以外は、すべて一次調整の縦ハケのみである。いず

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴



1・2はY₁—5号、3～8はV—4号古墳出土

9は9号、10は10号、11・12号は3号古墳出土



第150図 白藤古墳（上段）・下淵名塚古墳群（下段）出土の埴輪
(1・4・5・9～12は%、2・6～8は%、3は%)

IV 考 察

れの円筒埴輪も3段構成であり、第2段に半円形の透孔を有することを共通にしている。また、10号古墳の円筒埴輪には、第3段に円形の小型透孔が穿たれている点が注意される。

埴輪の様相からすると、古墳群の形成開始の時期が、白藤古墳群に若干後出する5世紀第4四半期にあることが推測される。

また、佐波郡赤堀町の地蔵山古墳群では、当該期の円墳15基のうち、相対的に墳丘規模の大きい6基から埴輪が確認されている。これらのうち1基のみはB種横ハケを伴ない、他は1次調整の縦ハケのみであり、いずれも3段構成である点で共通していた。⁽⁸⁾

以上のように、初期群集墳における埴輪の様相は古墳群を越えて均質な状況を示していることと、古墳群のうちのおよそ1/3ないし1/2の古墳に埴輪が伴なっていたことがわかる。5世紀後半における初期群集墳の成立に伴なって、埴輪樹立古墳は急激に増加したわけである。このことは、埴輪の大量需要を要請する動きとなって表れたことは当然であろう。その場合、それ以前の埴輪生産体制の延長上で生産がまかないきれたとは到底考えられないところである。量産に答えられる高度に組織化された新たな生産体制の整備が急速に進行したと考えざるを得ないところである。初期群集墳から出土する円筒埴輪が、3段構成・一次調整縦ハケ・半円形透孔へと定型化していく方向性をもち、また人物・動物埴輪の導入過程が類似していることは、新たな共通した生産体制の上にあったことを如実に示していると言えよう。

この時期はまた、生産力の飛躍的な増大を基礎にして、各小地域の地域的統合を遂げた首長層が各地に輩出し、前方後円墳を築造していく段階にあたっている。これらの前方後円墳が井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳に顕著に見られるように、群集墳に樹立された数十倍にもあたる質量とともに充実した埴輪をめぐらしていたわけである。このことが、この時期の埴輪生産体制の革新の直接の契機となつたことは言うまでもない。また、これらの首長層の

主導の下に組織化が進んだことも疑う余地のないところである。その組織化の端緒をなしたのは、前述の初期群集墳の様相からも窺われるよう、外面調整にB種横ハケを有する段階であった。しかも、これらは、窯窯焼成による製品であったことが、埴輪の検討から導き出される。

ところで、5世紀後半から6世紀初頭ないし前半にかけての時期に形成された初期群集墳を構成する小型古墳で埴輪を有するものを調べてみると、赤城山南麓とこれに面する南側の平野部に位置するものが圧倒的に多いことに気づく。その背景として次のようなことが考えられる。一つには、初期群集墳が上野地域内の他の地域にくらべて数多く形成されたことである。また、芳賀西部団地・白藤・地蔵山・下淵名古墳群に代表されるように、古墳群の規模が大きいものが多く、しかも、埴輪を樹立する古墳の割合が高い点も大きな要因となっている。

これらの事実は、5世紀後半における初期群集墳の成立と表裏一体の関係で、赤城山南麓のいずれかの地に大量需要に応じられる組織的な生産拠点が存在していたことを強く窺わせるものである。

この群集墳の濃密な分布域の中心的な位置に存在している前橋市今井神社古墳は、古墳時代後期の埴輪生産体制の成立の視点からも、今後特に注意していかなければならない古墳の一つであろう。全長71mの比較的大型の前方後円墳で、5世紀第3四半期を中心とした時期の築造が推定されるものである。この古墳から出土する埴輪は、B種横ハケを残して(9)おり、須恵質のものが認められる点が注意される。

かつて当古墳について実施された周濠調査の整理・報告書作成が、平成4年4月から予定されており、上述の視点からの分析が期待される。

小型古墳における埴輪樹立の盛行 横穴式石室が導入される以前にあたる後期前半の段階に、上野地域では既に大量需要に対応できる組織的な生産体制が整備されたことが、前項での検討から確実視された。その後、6世紀に入ると小型古墳への埴輪樹立はいっそう盛んになっていったことが、二つの側面

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

から知ることができる。一つは、埴輪出土古墳全体のなかで、この時期の小型古墳の数が圧倒的に多いという事実である。このことは、埴輪樹立の対象となる古墳のワクが、以前より拡大したことの結果と思われる。下條1・2号古墳は、直径10mにも満たない墳丘規模であり、多胡古墳群の中では最も規模の小さい部類に属するものである。具体的な数を確定できないが、多胡古墳群を歩いてみると、古墳の周囲に埴輪片の散見する事例は實に多い。

前述した佐波郡赤堀町の地蔵山古墳群では、横穴式石室を主体部とし、6世紀代に属することが推定される11基のうち、實に9基までが埴輪を有していた。

もう一つの側面は、今回の調査古墳の内容からも明らかなように、小型古墳の場合にも一古墳に樹立される埴輪の総量が、以前にも増して質量ともに一段と充実の一途をたどったことである。

6世紀の小型古墳への埴輪樹立の盛行を約束したのは、とりもなおさず前代における整備された埴輪生産体制の基盤であったことは言うまでもない。と同時に、前代にも増して一段と生産体制が拡大強化されていった動きを想定する必要があろう。

次項で詳しく触れるが、6世紀後半になると、下條2号古墳に典型的に見られるように、ついには小型古墳にまで、充実した内容の家・器財形埴輪が配置されるに至る。前方後円墳から小型古墳にいたるまで、一貫した地域独特の埴輪体系が成立したことを示すものであろう。

当地域では、從来から藤岡市周辺（藤岡市本郷及び白石）と太田市北西部の丘陵一帯（太田市金井地区）で埴輪窯跡が確認されており、その規模の大きさも踏まえて、両地域が上野地域の埴輪生産を中心的に進めていった地域として理解してきた。さらに一步進めて、この両地域で独占的に生産が行われ、上野地域内の各地に広く供給されたとする見解も示されている。⁽¹⁰⁾ 古墳時代後期後半に活発な生産が行われたことが推定されるこの2つの生産地が、当地域では傑出した規模を誇るものであったことは疑いない

ところである。しかし、次の理由から、これらより小規模ではあっても、両生産地以外に各地で生産が行われていた可能性が強い。一つは、主として6世紀後半以降になると、当地域の埴輪樹立古墳は空前の数に達し、到底これら二つの生産地では需要をまかない切れなかったことが推測される。また、遠隔地へ大型で非常にこわれやすい製品を恒常的に大量輸送することは、非効率的であること極まりないないからである。

その意味で、平成2年に実施された富岡市の下高瀬上之原遺跡の調査で発見された6世紀後半の築造⁽¹¹⁾が推定される2基の埴輪窯跡は極めて重要な意義を持つものであった。今後、この種の事例が増加していくものと推測される。

今後、古墳時代後期の埴輪生産、流通のシステムがどのようなものであったのかを、具体的に検討してゆく必要があろう。

(4) 形象埴輪の組成変化について

最近、橋本博文が、全国的な視野から全時期を通して形象埴輪の組成の変化をまとめている。本項では人物・動物埴輪出現以降の後期に限り、また前方後円墳に代表される大型古墳と群集墳との対比をする中で、上野地域の傾向を少し立ち入って検討してみたい。そこで、便宜的に考察1-(4)での配置形態からの時期区分に従って見て行くことにしたい。

1期（5世紀後半～末葉） この時期の大型古墳で、組成を検討していく上で良好な資料が出ているのは、井出二子山古墳と高崎市若宮八幡北古墳である。

井出二子山古墳（保渡田愛宕塚）古墳では、戦前の後藤守一による墳丘調査により、中堤上的一角に集中して人物・動物埴輪が確認された。また、昭和46年の墳丘調査では、周堀内から蓋形埴輪が出土している。最近、この古墳の北西側の隣接地で大量の埴輪を伴なう区画（突出遺構）が発見され、位置・出土埴輪の特徴から古墳との直接的関係が推測されている。そこから出土した形象埴輪は、家1、盾4、⁽¹²⁾人物31（盾持人16を含む）、馬3、犬1、猪1である。

IV 考 察

二子山に時期的に後出する保渡田八幡塚古墳では、中堤上の区画内（A区）から人物33、馬8、水鳥6、鶏2が確認されているが、家・器財については不明である。

若宮八幡北古墳は、全長46mの帆立貝式古墳で、5世紀第4四半期の築造が推定される。出土埴輪については現在整理中のため詳細は後日を期したいが⁽¹⁴⁾、少なくとも、人物、馬、犬、鹿、盾持人、盾、蓋が存在することは明らかである。

この時期の大型古墳が、大量の人物・動物埴輪を持ち、しかも動物の種類がバラエティーに富むものであったことがわかる。また、器財形埴輪の種類としては前期古墳以来の種類である盾・蓋に限定されており、翳・太刀・韁・鞞を伴なわない点を注意しておく必要があろう。

次に、この時期の群集墳の様相を見てみよう。

私が直接に調査・整理に關係することができた前述の下淵名古墳群では、埴輪出土古墳6基のうち、形象埴輪を伴なうのは2基（4・10号古墳）であった。4号古墳からは馬と器財（種類不明）形埴輪の破片2点であり、10号古墳からは甲冑形埴輪が推定される破片1点と種類不明のもの1点であった。遺存状態が悪かったことを考慮しなければならないが、それでも種類・量ともに貧弱なものであったことが推測される。また円筒埴輪のみで形象埴輪を伴なわない古墳が多く存在したことが推定される。形象埴輪が確認できた2基は、古墳群の中では1番目と2番目の墳丘規模であることから、埴輪構成にも墳丘規模との相関での差異が設けられていたものと思われる。白藤古墳群では、埴輪出土古墳14基のうち5基に形象埴輪が伴なっていた。形象埴輪の種類は人物と馬のみであり、器財形埴輪はまったく認められていない。人物・馬形埴輪も、1基の古墳について馬が1点、人物が1～2点であり、極めて貧弱な構成であったことが推測される。

今までのところ、群集墳で充実した内容の形象埴輪を伴なったものはみとめられていない。大型古墳と群集墳の間の差は格段のものであったことがわ

かる。

2期（6世紀初頭～中葉） 器財形埴輪の種類として、翳・太刀・韁・鞞が伴なうようになったのはこの時期のことと思われる。

太刀形埴輪の最も古い事例として前橋市王山古墳⁽¹⁵⁾が挙げられる。この古墳は、6世紀初頭の築造が推定される全長75.6mの比較的大型の前方後円墳であり、上野地域では初期に位置づけられる横穴式石室を有している。現在、埴輪を整理中なので、詳細は後日に期したいが、太刀の全高が1.5m以上に達するものと推定される大型品であり、きわめてリアルなつくりである点が特徴である。少なくとも10点以上存在したことが推定される。主体部を取り囲むように後円部墳頂に樹てめぐらされていた可能性が強い。6世紀前半の築造が推定される塚廻り4号古墳の太刀形埴輪も全高130cm以上を測り、リアルなつくりである点で王山古墳例に近いものである。

太刀形埴輪がモデルとしている三輪玉付きの勾金を有する太刀は、5世紀第3四半期の築造が推定される太田市鶴山古墳の副葬品が実物としての当地域⁽¹⁶⁾の初出例である。埴輪としては、井出二子山古墳突出遺構の首長を表したと推定される椅座男子像や天理参考館所蔵の同種の男子像が持っている太刀に認められるが、太刀形埴輪として独立したものは存在していない。

鞞形埴輪の最も古くさか上るものは、伊勢崎市の惠下古墳⁽¹⁸⁾から出土している。この古墳は戦前の調査であり、内容が不明確な部分も多いが、変形の組合式石棺を主体部とし画文帶神獸鏡、馬具類をはじめとし、豊富な副葬品を有しており、この時期の有力古墳の一つであったことがわかる。出土須恵器の主体をなすのは、陶邑古窯跡群のMT15型式の特徴を有することから、その築造時期を6世紀初頭ないし前半に置くことができる。

翳・韁形埴輪もこの時期に登場してくる種類であり、この後に一般化する翳・太刀・盾・韁・鞞の器財形埴輪の器制が成立する段階にあたっていたと理解することができる。形象埴輪の組成変化の過程の

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

中で画期の一つをなしていることがわかる。

この時期は、首長墓の主体部形式として横穴式石室が新たに採用された段階にあたり、近畿地方から新しい大きな波が押し寄せてきたわけである。埴輪組成の大きな変化も、このことと切り離して考えることはできないであろう。

これを物語るように、1期

あるいはそれ以前の段階の大型古墳には必ず伴なっていた蓋が、この時期に一部の例外を除いて完全に消滅する。

この時期、蓋は例外的に2例を知ることができるが、基本的には消滅していったことができる。

この時期にあっても群集墳を構成する小型古墳への形象埴輪の樹立は、わずかな人物・馬形埴輪を中心とするもので、前述の5種の器財形と家形埴輪は大・中型古墳にほぼ限られていたことが推測される。

3期(6世紀後半～6世紀末葉ないし7世紀初頭)

次表は器財形埴輪の種類別の出土古墳数である。当地域で横穴式石室が採用された6世紀初頭以降、前期以来の伝統的な器財形埴輪の組み合わせである「蓋・盾」から、「翳・太刀・盾・靱・鞆」の組み合せへの変化を明確に読み取ることができる。同時にこれらを樹立する古墳の数が圧倒的に増えている点が注目される。その背景には、2期の大型古墳の埴輪構成として新たに確立した器財形の組み合せが、3期に入り、下條1・2号や口明塚2号古墳に典型的に認められるような小型古墳へも及んでいたためである。それゆえ、この段階の群集墳の埴輪構成が厳密に検討されていったならば、大幅に該当古墳の数を増すことであろう。なお、上記の表の中で、古墳の詳細が不明のため「後期」として挙げた古墳の大半は、「後期後半」に含まれてくるであろう。

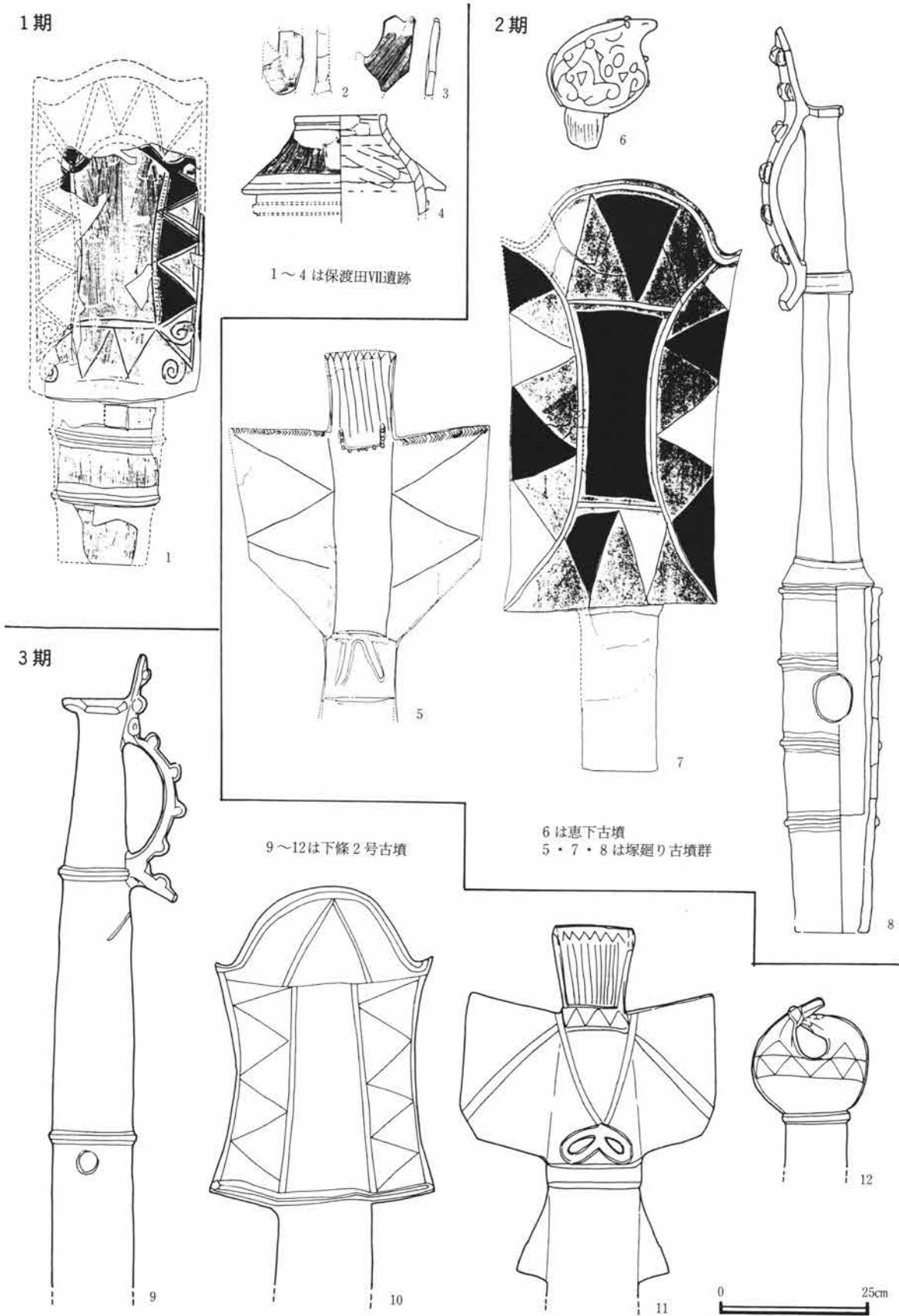
器財形埴輪の種類別出土古墳数

	蓋	翳	太刀	盾	靱	鞆	備考
前 期	0	0	0	1	0	0	
中 期	2	1	0	0	0	0	翳は赤堀茶臼山の周辺からの出土（後期の可能性あり）
後 期 前 半	8	0	0	7	1?	0	靱を出土したのは剛志村33号で、後期後半の可能性あり
後 期 後 半	2	20	32	36	52	14	
後 期	1	1	8	10	5	2	
計	13	22	40	54	58	16	

器財形の種類間で数量的に比較してみると、太刀・盾・靱と翳・鞆との間に大きな開きがあることに気づく。埴輪構成が確実に把握されている古墳で比較してみると、太刀・盾・靱の組み合わせを基本型にして、これに翳・鞆が加わるのがバリエーションとしてあったためと思われる。今後、さらに詳細に検討していくかなければならないが、少なくとも翳・鞆の有無が時期差・地域差に対応したものでないとだけは明らかである。

註

- (1) 埋蔵文化財研究会『第17回埋蔵文化財研究会資料 形像埴輪の出土状況』1985
- (2) 右島和夫「東国における埴輪樹立古墳の展開とその消滅」(『古文化談叢』21集下) 1989
- (3) 飯塚誠氏より教示を受けた。
- (4) 粕川村教育委員会『白倉古墳群』1989
- (5) 『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書5輯 1938
- (6) 上野地域の初期群集墳に関しては、右島和夫「群馬」(『古墳時代の研究』11) 1990 他でまとめている。
- (7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下淵名塚遺跡』 1991
- (8) 赤堀村教育委員会『赤堀村地蔵山の古墳1・2』 1977・1978
- (9) 黒田晃「円筒埴輪から見た今井神社古墳の築造年代」(『研究紀要』9 群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1992
- (10) 梅沢重昭「埴輪の発達」(『群馬県史』通史編1) 1990
- (11) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』10 1991
- (12) 橋本博文「配列・組合せの変遷」(『古墳時代の研究』9) 1992
- (13) 群馬町教育委員会「保渡田VII遺跡」 1990
- (14) 高崎市原始古代部会古墳班で整理を進めている。
- (15) 松島栄治・中村富夫・右島和夫「前橋市王山古墳の調査」(『日本考古学協会総会研究発表要旨』) 1991
- (16) 右島和夫「鶴山古墳出土遺物の基礎調査V」(『群馬県立歴史博物館調査報告書』6号) 1990
- (17) 右島和夫「天理参考館所蔵の男子人物埴輪」(『高崎市市史編さんだより』4号) 1992
- (18) 梅沢重昭「恵下古墳」(『群馬県史』資料編) 1981



第151図 古墳時代後期の器財形埴輪